

英語法助動詞の命題内容の時間性と現存性をめぐって

著者	長友 俊一郎
雑誌名	研究論集
巻	108
ページ	169-187
発行年	2018-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007826/

英語法助動詞の命題内容の時間性と現存性をめぐって*

長 友 俊一郎

要 旨

各英語法助動詞の特徴を考察する際の重要な問題に、法助動詞の命題内容が、過去、現在、未来のいずれの状況／事柄になっているか、そして話し手と聞き手はそれを事実として把握しているかがある。本研究の目的は、法助動詞の命題内容の「時間性」と「現存性」について検証し、それらと各法助動詞との密接な関わりを意味論的・語用論的に明らかにすることにある。本稿での検証の結果は、認知文法で指摘されている、法助動詞と「現存性」／「非現存性」との関連に関する特徴づけの再考を促すものであると思われる。本研究では、認知文法のアプローチを出発点とし、「推量」や「判断」などを表す) 認識的 may、will、must の命題内容の時間性に関する特徴、「評価的」な should と「是認」を表す may の命題内容の現存性に関する特徴を明らかにすることにより、時間性と現存性に関する理解を深め、それらの概念の重要性を主張する。

キーワード：英語法助動詞、モダリティ、現存性、非現存性

1. はじめに

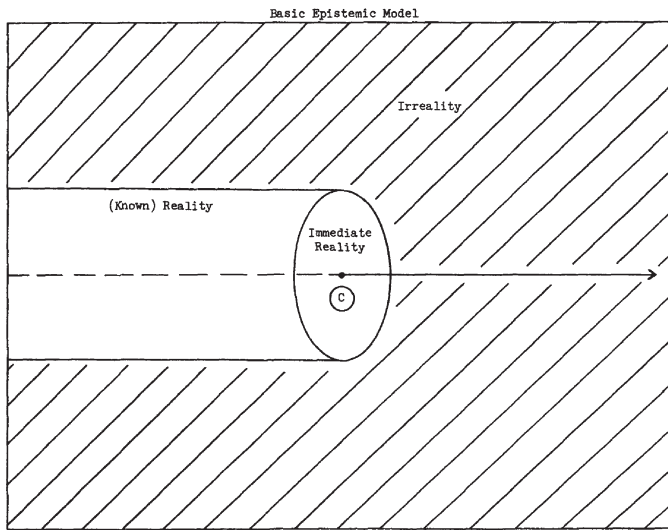
各英語法助動詞の特徴を考察する際の重要な問題に、法助動詞の命題内容が、過去、現在、未来のいずれの状況／事柄になっているか、そして話し手と聞き手はそれを事実として把握しているかがある。本稿の目的は、法助動詞の命題内容の「時間性」と「現存性」について検証し、それらと各法助動詞との密接な関わりを意味論的・語用論的に明らかにすることにある。本研究は、認知文法で指摘されている、法助動詞と「現存性」(reality)／「非現存性」(irreality) との関連に関する特徴づけの再考を促すものであると思われる。

まず、2 節では、認知文法の法助動詞分析で述べられている時間性と現存性の特徴を概観する。認知文法のアプローチを出発点とし、3 節では、「推量」や「判断」などを表す) 認識的 may、will、must の命題内容の時間性に関する特徴、4 節では、「評価的」な should と「是認」を表す may の命題内容の現存性に関する特徴を明らかにすることにより、時間性と現存性に関する理解を深め、それらの概念の重要性を主張する。5 節は結論である。

2. 認知文法からの法助動詞分析

Langacker (1991: 245-246) は、「現存性」(reality) と「非現存性」(irreality) という領域を提出し、「基本的な認識モデル」(basic epistemic model) によって、両者を(1)のように表した。

(1)



(Langacker 1991: 242)

ここで実線の円筒は、現存性の進展を表している。現存性とは、ある「概念化主体」(conceptualizer) にとって現存的 (real) と認められた「状況」(situation) (もしくは「事態」(state of affairs)) と定義される。非現存性とは、それ以外の状況／事態である。両者の違いについて、Langacker は、(2)のように述べている。

(2) It is important to bear in mind that a situation does not belong to reality or irreality on the basis of how the world has actually evolved, but depends indeed on whether the conceptualizer knows and accepts it as being part of that evolutionary sequence.

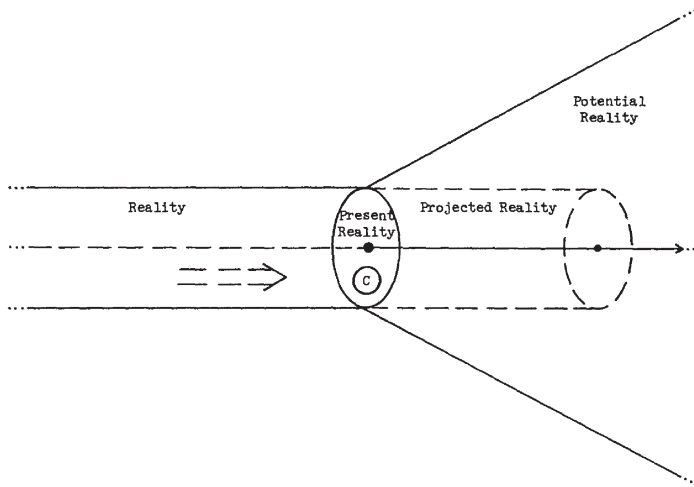
(Langacker 1991: 234)

ある状況が現存性に属するか非現存性に属するかは、世界（すなわち、概念化主体を取り巻く客観的な外界）が実際にどのように進展してきたかによるものではなく、概念化主体が世界の

進展する連続体の一部としてその状況を知り、かつ認めているかどうかということである。したがって、現存性は、「既知的現存性」(known reality)と呼ぶことが可能な領域ということになる。

法助動詞は「作用」(process)／命題を非現存の領域に置くとされている (Langacker 1991: 245-246)。これは、(1)を精密化した、(3)の「動的進展モデル」(dynamic evolutionary model)によって説明されている。

(3) 動的進展モデル：



(Langacker 1991: 277)

ここでは、非現存の領域は「投射された現存性」(Projected Reality)と「潜在的な現存性」(Potential Reality)に分けられている。前者は、進展の勢いに沿って未来の事柄が確実に生じるであろうと捉えられた領域であり、後者は、概念化主体が生じることが妨げられないと捉える領域である。(4)の例を見られたい。

(4) a. She *{is/was}* upset.

b. She *{will/may}* be upset.

(Langacker 2004: 544)

(4a) の *is* のような現在時制は、その作用を「現在の現存性」(Present Reality)に置くとされ、*was* のような過去時制は、その作用を「過去の現存性」(Past Reality)の領域に置くとされている。したがって、(4a)における「彼女が動転している」という作用は、現在もしくは過去の現存領域に置かれることになる。一方、(4b)の斜字体のような法助動詞は、作用を未来の

非現存的領域に置くとされる。たとえば、will は、投射された現存性の領域に作用を置くとされ、may は、潜在的な現存性の領域に作用を置くとされている (cf. Langacker 1991, 2002, 2004, 2008, 2010, 2012, 2013 など, cf. Luque Agulló 2015: 300)。

3. 法助動詞の命題内容の時間性

3.1 認識的 may の命題内容の時間性

(4b) の事例では、法助動詞の命題内容は、未来に関連するという特徴が述べられている。前出 (4b) をもう一度考えてみよう。

(5) (= (4b)) She *may* be upset.

(5) は、(6) と (7) に書き換えることができる (cf. Palmer 1990: 52)。

(6) *It is possible* that she *will* be upset.

(7) *It is possible* that she *is* upset. (cf. Leech 2004: 93)

(6) の解釈の場合、「彼女が動転する」することは未来の事柄である。一方、(7) の解釈では、「彼女が動転する」ことは現在の出来事である。すなわち、(5) における may の命題内容は、未来の事柄にも現在の事柄にもなり得る。(8) を見られたい。

(8) He *may* be a university professor, but I doubt it because he's so dumb.

(Sweetser 1990: 70)

(8) は、「彼は大学教授かもしれないが、彼は愚鈍であるため、私はそれを疑う」というものであるが、ここで may の命題内容である「彼は大学教授である」ことは現在の状況である。これは、(8) が (9) のように、「it is possible + 現在形」で書き換え可能であることから裏づけられる。

(9) *It is possible that* he *is* a university professor, but I doubt it because he's so dumb.

(Sweetser 1990: 70)

次の例 (フランゼン『コレクションズ』から) も同様である。

- (10) “Americans don’t like sauerkraut,” Zito said.

“The hell they don’t. I’ve seen my reflection in the plates coming back when people order it. I’ve counted my eyelashes.”

“It’s possible we get some German nationals in here,” Zito said. “*German passport-holders may be responsible for those clean plates.*”

“Is it possible you don’t like sauerkraut yourself?”

(J. Franzen, *The Corrections*) (斜体筆者)

ドイツの漬物の一種であるザウークラウトが、皿からきれいになくなっている。その場面で、「ドイツのパスポートを持っている人が平らげられた皿の原因かもしれない」といった発話が may を用いて行われている。ここでの may の命題内容は現在の状況である。(10)の斜字体部は「It is possible + 現在形」で書き換え可能である。

- (11) *It is possible that* German passport-holders *are* be responsible for those clean plates.

(12)のように、認識的 may が頻度を表す副詞的語句と共起し、習慣的行為に言及することができることも、may の命題内容が現在の状況になり得ることを裏づけている。

- (12) He *may* go to London *every day*.

(Palmer 1990: 52)

may の命題内容は過去や過去完了にもなり得る。(13)は(14)のように、「It is possible that + 過去形」でパラフレーズ可能である。(13)の may の命題内容の「彼らが去年来た」ことは過去の事柄である。

- (13) They *may* have come last year.

(Leech 2004: 99)

- (14) *It is possible that* they *came* last year.

(Leech 2004: 99)

次の例 (パレツキー 『バースデイ・ブルー』) を考えてみよう。

- (15) “I’m trying to get a lead on who Deirdre met with the night she died. *That person may have seen her murderer*— without knowing it was someone committing murder, of course. So I’m talking to people in the organizations where she volunteered. Home Free and Arcadia House....”

(S. Paresky, *Tunnel Vision*) (斜体筆者)

ここでは、ディアドリ殺人は may を含む発話の以前に既に行われている。よって、(15)の斜字体部の may の命題内容の「その人物がディアドリの殺人犯を見た」ことは過去の出来事である。事実、(15)の斜字体部の発話は、「It is possible that + 過去形」でパラフレーズ可能である。

(16) *It is possible that that person saw her murderer.*

3.2 認識的 will の命題内容の時間性

前出 (4b) の will の事例をもう一度考えてみたい。

(17) (= (4b)) *She will be upset.*

ここでの will が認識的モダリティを表していると想定すると、(17)は(18)のように言い換え可能である。すなわち、認識的 will の命題内容は現在の状況となり得る。

(18) *A reasonable inference is that she is upset.*

次の例を考えてみよう。

(19) *Tell him professor Cressage is involved—he will know Professor Cressage.*

(will = 認識的) (Palmer 1990: 57)

(20) [Knock on door] *That will be the plumber.* (will = 認識的)

(Huddleston and Pullum 2002: 188)

(19)-(20)の will を含む文は、次のようにパラフレーズ可能である。(19)の「Cressage 教授を知っている」ことと、(20)の「水道工事がドアの外にいる」ことは現在の状況である。

(21) *A reasonable inference is that he knows Professor Cressage.* (Palmer 1990: 57)

(22) *A reasonable inference is that that is the plumber.*

認識的 will が現在の事柄を表すことは、認識的 will が現在と関連する副詞的語句と共起し得ることからも知られる。(23)では、will が現在を表す now と共起している。

- (23) John *will* be in his office *now*. Yes, the lights are on, so he must be there.

(Palmer 1990: 58)

次の例（イシグロ『忘れられた巨人』）を考えてみよう。

- (24) 'Good lady, the island this old woman speaks of is no ordinary one. We boatmen have ferried many there over the years, *and by now there will be hundreds inhabiting its fields and woods*. But it's a place of strange qualities, and one who arrives there will walk among its greenery and trees in solitude, never seeing another soul....'

(K. Ishiguro, *The Buried Giant*) (斜体筆者)

ここでは、船頭が大勢の人々を運んだ不思議な島について述べている。斜字体部では、*will* が現在との関連があることを表す副詞的語句 *by now* と共起している。すなわち、「何百人という人があの島の野や森に住んでいる」という *will* の命題内容は現在の状況である。

次の例（マンテル『ウルフ・ホール』から）はどうであろうか。

- (25) It's not the hand of God kills our children. It's disease and hunger and war, rat-bites and bad air and the miasma from plague pits; it's bad harvests Eke the harvest this year and last year; it's careless nurses. He says to Wolsey, 'What age is the queen now?'

'*She will be forty-two, I suppose.*'

'And the king says she can have no more children? My mother was fifty-two when I was born.'

(H. Mantel, *Wolf Hall*) (斜体筆者)

ここでは「彼」はウルジーに「今（=now）おいくつですか」と尋ねている。この返答してウルジーによる「彼女は40歳でしょう」という発話が行われている。ここでの発話は、(26)と同義であり、*will* の命題内容の「彼女は42歳である」ことは現在の状況である。

- (26) She *will* be forty-two *now*.

認識的 *will* の命題内容も *may* 同様に現在完了や過去の事柄になり得る。

- (27) We can't go and see them now—they'll have gone to bed.

(Swan 2005: 616)

- (28) They *will* have made the decision *last week*. (Huddleston and Pullum 2002: 188)

(27)では、会いに行くことができない理由／説明が *will* と共に述べられている。そこでは、「彼らは眠りについた」という現在完了の事柄が述べられている。(28)では、*will* の命題内容に過去を表す副詞的語句 *last week* が含まれている。

同様の例が BNC コーパスにもみられる。

- (29) *I think you will have watched Ian Smith on the BBC last week.*

We saw bits of the programme here.

He was at his most stubborn, and gave the predictable answers to the obvious questions.

I hear that it provoked an extremely fierce response from Sithole. (BNC GXK 541)

3.3 認識的 *must* の命題内容の時間性

法助動詞の命題内容の時間性は、法助動詞の使い分けに重要な役割を果たしている。認識的 *should* と認識的 *must* の用法の違いは、それぞれの命題内容がいつの状況のことであるかに関連する。次の例（イシグロ『遠い山なみの光』）を考えてみよう。

- (30) Mariko came away from the window and returned to her kittens. The older cat had appeared and the kittens had curled up to their mother. Mariko lay down beside them and started to whisper. Her whispering had a vaguely disturbing quality.

"Your mother should be home soon," I said. "I wonder what she can be doing."

Mariko continued whispering.

"She was telling me all about Frank-San," I said. "He sounds a very nice man."

The whispering noises stopped. We stared at each other for a second.

(K. Ishiguro, *A Pale View of Hills*) (斜体筆者)

ここでの斜字体部では、話し手は万里子に対して「あなたのお母さんはすぐに帰ってくるはずだ」と述べている。*soon* という副詞的語句が用いられていることから知られるように、ここでの *should* の命題内容は未来に言及している。このような場合、認識的 *should* は認識的 *must* に置き換えることはできない。

- (31) Your mother {**must* /*should*} be home soon. (認識的)

認識的 *must* の命題内容が未来の状況とならないことは、次の事例によっても確かめることができる。

- (32) The postman has just driven past, it *must* be twelve.
(33) The postman has just driven past, it *must* have been twelve five minutes ago.
(34) *The postman has just driven past, it *must* be twelve in five minutes.

((32)-(34): Riviere: 1981: 188-189)

(32)と(33)では、それぞれ「(今) 12時である」という現在の状況と「5分前に12時だった」という過去の状況が *must* の命題内容となっている。これらの場合の *must* の使用は自然であるが、(34)の「あと5分前で12時になる」のように未来の状況が命題内容となる場合、*must* は使用することができない。同様の指摘は Lakoff (1972) にも見られる。(35)では、法助動詞が未来の事柄である。「このことが今日の午後までになされる」と共起しているが、この場合においても、認識的 *should* と対照的に *must* は通例使用することができない。

- (35) This {**must* / *should*} be done by later this afternoon. (認識的) (Lakoff 1972: 233)

よって、認識的 *must* には次のような命題内容条件が課されることになる。

- (36) 非未来性条件 (Non-future Condition) :

その命題内容は (単純未来の *will* で表されるような) 未来の状況であってはならない。

(澤田 2006: 12)

次の例を考えてみよう。

- (37) A: Susy is yawning and rubbing her eyes.
B: She *must* be sleepy. Let's put her to bed early tonight.
(38) Look. Jack's car is in front of his house. He *must* be at home. Let's stop and visit him.

((37)-(38): Azar and Hagen 2009: 190)

(37)-(38)の認識的 *must* は、(39)-(40)のように、単純未来の *will* に置き換えることができない。

- (39) She {**will* / *must*} be sleepy. (コンテキスト = (37))

- (40) He {**will* / *must*} be at home. (コンテキスト = (38))

((39)-(40): Azar and Hagen 2009: 190)

4. 法助動詞と現存性

4.1 現存性条件

前出のように、Langacker は法助動詞の命題内容は、非現存領域に置かれるとする。次の例を考えてみよう。

(41) If Holmes had been playing, Scotland *{might / could / should / *must}* have won.

(澤田 2014: 404)

(41)では、「仮にあの時ホームズがプレイしていたら、スコットランドは勝ったのに」(=if Holmes had been playing, Scotland would have won.) という、話し手が事実としては見なししていない事柄についての話し手の推量が述べられている。このケースにおいては、*might*, *could*, *should* といった命題内容を非現存領域に置く法助動詞とは対照的に、認識的 *must* は用いることができない (cf. 澤田 2014: 404)。すなわち、認識的 *must* には、(42)の現存性条件が適用される。

(42) 現存性条件：その事柄は現存的でなければならない。 (澤田 2006: 444, 2014: 406)

次の例 (パレツキー『ビター・メモリー』から) を考えてみよう。

(43) “.... I wish you hadn’t called the cops, though. Now they’ll be around wanting to interrogate Connie. Who I refuse to believe killed the guy. *She might have shot him—if she had a gun—if she’d agreed to go see him—and if he’d stepped across the line.* But can you picture her scheming to make a murder look like suicide?”

(S. Paresky, *Total Recall*) (斜体筆者)

ここでの斜字体部では、「仮にコニーが銃を持っていたら、仮にあの時やつに会うことを承知していたら、仮にあの時やつが不埒な行動に出ていたら、彼女が撃ったかもしれない」と現存的ではない事柄についての話し手の推量が見られる。また、仮定法過去完了が用いられているために、「反実仮想」となっている。ゆえに、現存的ではない。ここでの *may* の命題内容の「彼女が彼を撃った」ことが現存的でないことは、「コニーがあつた男を殺したなんて、ほくは

ぜったい信じない」という文脈や、「コニーが殺人を自殺に見せかけようとして細工するなんて、想像できる？」という文脈からも明らかである。ここでの *might* も、現存的状況が命題内容となる認識的 *must* には置き換えることができない。

- (44) She *[might/*must]* have shot him—if she had a gun—if she'd agreed to go see him—and if he'd stepped across the line.

以下、評価的 *should* と「是認」を表す *may* の命題内容の現存性を検証してみたい。また、法助動詞の本質は「非確言」であるとする Palmer の見解を援用する中で、どのようなコンテキストの時に法助動詞の命題内容が現存的になるのかを考察してみたい。

4.2 評価的 *should*

(45)-(46) は、「評価的」(evaluative) *should* (Palmer 1986: 154, 1990: 190) が用いられた事例である (cf. Huddleston and Pullum 2002: 186)。

- (45) It is inconceivable that Peter *should* marry Suzan. (Aijmer 1972: 79)
(46) It's surprising that she *should* say that to you. (Swan 2005: 512)

should の命題内容である (45) の「Peter は Suzan と結婚する」ことと、(46) の「そのようなことを君に言う」ことは、現存的な状況と言える (cf. Aijmer 1972: 79, Larreya 2003: 36ff.)。Swan が (47) に特徴づけるように、(45)-(46) のような、感情的表現を主文に持つ *that* 節内に用いられる *should* によって表されている命題内容は、話し手にとって既知の情報である。

- (47) *should* is also used in subordinate clauses after words expressing personal judgements and reactions, especially to facts which are already known or have already been mentioned. (Swan 2005: 512)

関連して、Behre (1955: 42) は、(48) には、(49) が前提となとしている。

- (48) It is unfortunate that Crabbe *should* be left to students of literature.
(49) Crabbe is left to students of literature. ((48)-(49): Behre 1955: 42)

次の事例においても、同様の特徴づけが可能である。

- (50) a. And what a pity that the care of the business *should* take up so much of the time and energies that might be better employed!
- b. It was unfortunate, of course, that any man – even Salvatore Ferraro – *should* die so young and so suddenly.
- c. At first sight it is curious that our own offences *should* seem to us so much less heinous than the offences of others.
- d. The puzzle is that so many varied and splendid qualities *should*, in the aggregate, leave such an unsatisfying impression upon the mind.
- e. ‘I’m surprised that anyone of your intelligence *should* be so foolish as to take any notice of superstitions of that kind.

(Behre 1955: 46-48)

次の例（マンテル『ウルフ・ホール』から）を考えてみよう。

- (51) Antonio Bonvisi, More’s friend, excuses himself and says he will go home; ‘The Trinity bless and prosper you,’ he says, withdrawing and taking with him the mobile island of chill which has followed him since his unexpected arrival. ‘You know,’ he says, turning at the door, ‘if there is a question of help for Mistress Petyt, I shall be glad—’

...

Bonvisi nods and goes out. ‘*Surprising he should show his face.*’ John Parnell, of the Drapers’ Company, has a history of clashes with More.

(H. Mantel, *Wolf Hall*) (斜体筆者)

ここでは、織物商組合のジョン・パーネルが、斜字体部で「顔を出すなんて驚きだ」と述べている。ここでの主語 he は、モアの友人であるアントニオ・ボンヴィシを指しており、直前まで実際にその場にいた人物である。すなわち、should の命題内容の「彼が彼の顔を出した」ことは現存的事柄である。

次の例（マンテル『ウルフ・ホール』から）も同様である。

- (52) The crowds outside his gate have dispersed, as Thurston has fed them an Easter dinner. He goes out to the kitchen first, to give his man a slap on the head and a gold piece. ‘A hundred open maws, I swear,’ Thurston says. ‘And by supper time they’ll be round again.’ ‘*It is a shame there should be beggars.*’ (H. Mantel, *Wolf Hall*) (斜体筆者)

ここでの *should* の命題内容の「物乞いの人がいる」ことは、話し手にとって現存的状況である。話し手の Thurston は、発話の直前に自宅の門の外にいたそのような人たちに実際に食事を提供している。

should がすぐれて現存的内容について用いられる理由は、法助動詞の持つ非確言性の特徴と関連すると思われる。Palmer (2001: 3ff., 2003: 5ff.) は、Lunn (1995) の研究を援用する中で、(53) のように、モダリティは、命題の「ありよう」(status) に関連し、命題が「真」(true) であるかどうかという観点からの特徴づけでは十分ではなく、「確言」(assertion) か「非確言」(non-assertion) という観点からの特徴づけが必要であるとしている。

- (53) The feature associated with modality is slightly different in that it does not relate directly to the event or situation, but to the status of the proposition that describes the event or situation. Prima facie it might seem to be concerned with whether the proposition is true (or factual) or not, but this is not entirely satisfactory. ... the essential feature of modality is that of “assertion” vs. “non-assertion.” (Palmer 2003: 5)

確言が行われないコンテキストは以下の通りであるとされる。

- (54) a. 話し手が命題内容の真相について疑念を持っており、命題内容に関する真偽値が明らかではない場合
b. 命題内容が実現されておらず、真偽値が明らかではない場合
c. 命題内容が話し手と聞き手によって前提とされており、価値がある情報とは見なされない場合 (Lunn 1995: 230)

Palmer は、評価的 *should* を含む(55)を提示し、(54c) の共有情報に由来する非確言性と英語法助動詞との関わりを指摘している。

- (55) I'm surprised that you *should* think that. (Palmer 2003: 6)

Palmer は、「君がそう思う」という *should* 命題内容が、話し手と聞き手によって事実として受け入れられており、情報価値が高くなく確言されないため、法助動詞 *should* が用いられているとしている。前出の(51)においても、命題内容が話し手・聞き手の両者にとって現存的である。(51)の *should* の命題内容の「ボンヴィシが顔を出す」ことは、前述のように話し手にとって現存的であるだけでなく、聞き手も同じ現場にいた人物であるため、聞き手にとって

も現存的状況である（と話し手は把握している）。モダリティは、非現存性の領域に属する命題内容と関連するというより、Palmer（2003: 5）や澤田（2018: 6）で示唆されているように、モダリティは断言・確言をしない表現／断言・確言を避ける表現と関連すると思われる。

4.3 「是認」の may

まず、「是認」を表す may の命題内容の現存性に関して、(56)を考えてみよう。

(56) The sun *may* rise in the East, but it sets in the West. (Souesme 2009: 161)

Souesme が(57)に述べる内容から知られるように、ここでの may の命題内容の「太陽が東から昇る」ことは、現存的内容となっている。

(57) the occurrence of *may* is non epistemic, since the truth-value of the statement is unquestionable. (Souesme 2009: 161)

(56)のような「是認」を表す may は、I accept the fact that を含意する (cf. Swan 2005: 344)。たとえば、(58)において、「彼が私の兄弟である」ことは、話し手が事実として受け入れている内容である。

(58) *may* can also imply “I accept the fact that”:

But he’s your brother! ~ He *may* be my brother but I don’t trust him!

(Thomson and Martinet 1986: 299)

関連して、このタイプの may は、(59)-(61)にあるように、I admit/concede that でパラフレーズ可能である。

(59) We *may* have our differences from time to time, but basically we trust one another’s judgment.

= I *admit that* we have our differences ... but ... (Quirk et. al. 1985: 224)

(60) The buildings *may* be old, but academically it’s an excellent school.

= I *admit that* the buildings are old, but academically it’s an excellent school.

(Leech 2004: 76)

(61) It *may* be expensive, but it’s worth every penny.

= *I concede that it is expensive, but ...* (Huddleston and Pullum 2002: 182)

may の命題内容の現存性は、是認を表す may を含む節が動詞を用いて置き換え可能であることから知られる。

(62) The timing *may* be uncertain but the outcome is absolutely certain.
= Although the timing *is* uncertain ... (Collins 2009: 93)

(63) However misguided and deluded we *may* believe the rulers of this period and their advisers to have been in seeking to resolve conflicts by force of arms, the relative weakness of diplomatic alternatives must always be borne in mind.
= Although we *believe* the rules of this period and their advisers to have been in seeking to resolve conflicts by force of arms, ... (Collins 2009: 93)

Sweetser (1990) は、「是認」の may を言語行為的 may と称し、認識的 may と区別している。(64)にあるように、是認を表す may は I admit that で言い換え可能であり、(65)にあるように、認識的 may は It is possible that で言い換え可能であるとしている。

(64) He *may* be a university professor, but he sure is dumb.
= *I admit that* he's a university professor, ... (Sweetser 1990: 70)

(65) (= (8)) He *may* be a university professor, but I doubt it because he's so dumb.
= *It is possible that* he is a university professor, ... (Sweetser 1990: 70)

澤田 (2006) は、may が言語行為的意味を表しているのか、認識的意味を表しているのかを識別するにあたり、(66)を提示している。

(66) 言語行為的 may/might (= 「是認」) は認識副詞 perhaps と共起することや could に置き換わることは不可能であるが、認識的 may/might (= 「可能性」) はそれが可能である。(澤田2006: 364, cf. Thomson and Martinet 1986: 131, Quirk et al. 1985: 223)

言語行為的 may が用いられている(64)は、(67)のように perhaps との共起が不自然であるのに対して、認識的 may が用いられている(65)は、(68)のようにそれが自然である。

(67) ?? *Perhaps* he *may* be a university professor, but he sure is dumb.

- (68) *Perhaps* he *may* be a university professor, but I doubt it because he's so dumb.

次の例（ストラウト『オリヴ・キタリッジの生活』から）を考えてみよう。

- (69) In fact, the Newtons told a story that night about how their grandson had said to Bunny just last week, "*You may be my grandmother, but that doesn't mean I have to love you, you know.*" (E. Straut, *Olive Kitteridge*) (斜体筆者)

(69)の斜字体部はバニーの孫の発話である。よって、「おばあちゃんは僕のおばあちゃんだ」という *may* 命題内容は、話し手にとって現存的事柄である。これは、(70)のように、「もしかしたら」という表現（=*perhaps*）を挿入することができないことから裏づけられる（cf. Quirk et al. 1985: 223, Thomson and Martinet 1986:131, 澤田2006: 364）。

- (70) **Perhaps* you *may* be my grandmother, but that doesn't mean I have to love you, you know. (コンテキスト = (69))

次の例（パウワー『ブラックランズ』）においても、*may* の命題内容は現存的である。

- (71) "It is mine. Isn't it?" He even managed to inject a very small note of anger into the words and suddenly Lettie was on the back foot. She'd opened a letter that didn't belong to her. Whatever the circumstances, that was difficult to justify.
But she tried.
"*It may be your letter, Steven, but if this is from some girl, then the business of it is mine too. ...*" (B. Bauer, *BlackLands*) (斜体筆者)

ここでは、スティーヴンはレティに対して、レティが開封したのは自分宛ての手紙だと述べている。許可なくスティーヴンの手紙を空けた弁明としてレティは、是認の *may* を用いて「確かにあなたの手紙だけだ」と述べている。この文脈から、(71)の *may* の命題内容である「手紙は君宛である」ことは、話し手のレティにとって現存的状況であるであることが分かる。ここの *may* も *perhaps* とは共起することができない。

- (72) **Perhaps* it *may* be your letter, Steven, but ... (コンテキスト = (71))

前節の should と同様、「是認」の may の命題内容も、話し手と聞き手両者にとって現存的である。(69)の命題内容の「おばあちゃんは僕のおばあちゃんだ」は、話し手である孫だけではなく、聞き手の祖母のバニーにとっても当然の事実である。(71)では、may の命題内容は「手紙があなた宛てだ」というものである。これは話し手のレティだけではなく、聞き手のスティーヴンにとっても現存的状況である。スティーヴンは直前にレティに「僕宛ての手紙でしょ？」と述べている。

ここで、法助動詞の使用と現存性に関して、(73)を提出しておきたい。

- (73) 命題内容が話し手と聞き手の両者にとって現存的状況である（と話し手が把握する）場合、すなわち、命題内容が前提となる場合、法助動詞が用いられ得る。

5. おわりに

本研究では、法助動詞の命題内容は未来の状況／事柄のみではなく、現在・過去・過去完了の状況／事柄にもなり得ることを例証し、その命題内容の時間性が法助動詞の使用に重要な役割を果たしていることを論じた。また、法助動詞の命題内容は非現存的状況とは限らず、現存的状況となることもあることを主張した。関連して、話し手と聞き手の両者にとって命題内容が現存的である場合に、法助動詞が使用され得ることを述べた。本稿での論考は、Langacker の認知文法に基づく法助動詞分析における、「現存性」の概念に関する再考を促すものであると思われる。

* 本研究は学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（18K00671））を受けたものである。

参考文献

- Aijmer, K. 1972. *Some Aspects of Psychological Predicates in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Azar, B. S. and S. A. Hagen. 2009. *Understanding and Using English Grammar*. 4th ed. New York: Pearson Longman.
- Behre, F. 1955. *Meditative-polemic Should in Modern English That-clauses*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- de Haan, F. 1997. *The Interaction of Modality and Negation: A Typological Study*. New York: Garland.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, R. 1972. "Pragmatics of Modality." *Papers from the 8th Regional Meeting Chicago Linguistic Society*.

- pp. 229-246.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundation of Cognitive Grammar*. (Vol. II). *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- 2002. The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death. *Proceedings of the 2nd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 2, pp. 193-220.
- 2004. "Aspects of the Grammar of Finite Clauses." In Achard, M and S. Kemmer (ed.), *Language, Culture, and Mind*, pp. 535-577. Stanford: CSLI.
- 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- 2010. "Control and the Mind/Body Duality: Knowing vs. Effecting." In Tabakowska, Elzbieta, Michal Choinski, and Lukasz Wiraszka. (eds.) *Cognitive Linguistics in Action: From Theory to Application and Back*, pp. 163-207. Berlin: Walther de Gruyter.
- 2012. "Substrate, System, and Expression: Aspects of the Functional Organization of English Finite Clauses." In Brdar, Mario, Ida Raffaelli, and Milena. Žic Fuchs. (eds.) *Cognitive Linguistics between Universality and Variation*, pp. 3-52. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- 2013. "Modals: Striving for Control." Marin-Arrese, Juana I., Marta Carretero, Jorge Arús, and Johan van der Auwera, (eds.) *English Modality: Core, Periphery and Evidentiality*, pp. 3-55. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Leech, G. 2004³. *Meaning and the English Verb*. Tokyo: Hituji Shobo /London: Longman.
- Lunn, P. V. 1995. "The Evaluative Function of the Spanish Subjunctive" In Bybee, J. and S. Fleischman (eds.), *Modality in Grammar and Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Luque Agulló, C. 2015. "The Concept of Modality Through Cognitive Grammar and the Conceptualization of Emotions." In Zamorano-Mansilla Juan Rafael, Carmen Maiz, Elena Domínguez, and M^a Victoria Martín de la Rosa. (eds.) *Thinking Modally: English and Contrastive Studies on Modality*, pp. 299-324. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- Palmer, R. F. 1979/1990². *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- 1986/2001². *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2003. "Modality in English: Theoretical, Descriptive and Typological Issues." In Facchinetti et al. (eds.), *Modality in Contemporary English*, pp. 1-20. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rivière, C. 1981. Is *Should* a Weaker *Must*?. *Journal of Linguistics* 17, pp. 179-195.
- 澤田治美 2006. 『モダリティ』 開拓社.
- 澤田治美 2014. 『現代意味解釈講義』 開拓社.
- 澤田治美 2018. 『意味解釈の中のモダリティ (上)』 開拓社.
- Souesme, J. 2009. "MAY in concessive contexts". In Salkie R., P. Busuttil, and J. van der Auwera (eds.)

- Modality in English: Theory and Description*, pp. 159-176. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Swan, M. 1995²/2005³. *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: University of Cambridge Press.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986⁴. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

(ながとも・しゅんいちろう 英語国際学部准教授)

